

## 花鳥画

## — 仮想の楽園

2020年1月18日(土)～4月26日(日)

本展においてとりあげる花鳥画とは、文字通り「花」と「鳥」を画面に描きこんだ作品のことをさします。優雅な鳥と美しい花によって構成される花鳥画は、古来より多くの人々を魅了し、様々な場面で描かれてきました。美術館の展示品としてだけでなく、城郭や寺院のなかで花鳥の図様をご覧になったことのある方も多くと思います。

しかしながら、花鳥画とは単に美しく綺麗なだけのものでは決してありません。例えば高浜虚子は自らの俳諧理念として「花鳥諷詠」という思想を打ち出しましたが、彼は「花鳥」を自然界でおこっている現象とは捉えていません。「花鳥」を通して、人事界の機微を詠むことこそが彼の理想でした。絵画においても、それは同様です。

本展の出品作のひとつをみてみましょう。画面右下から弧をえがくように松の幹が伸び、ふもとからは1輪の白いバラが咲き誇ります。その松の幹と枝に、それぞれ1羽の鳥がとまっています。下から呼びかける鳴き声に、枝上の鳥が気づいたまさにその瞬間を描いているのでしょう。ただ、この場面は画家が実際に見た情景ではなく、構図の根底には中国最古の詩集『詩経』の思想が根付いています。「嘯として其れ鳴くは、真の友を求むる声なり」です。

仲間とともに自らも成長していきたいという想いを、上下で鳴き交わす鳥にかつての人々は仮託しました。花鳥を描くことにより、理想の世界を作りだしたのです。それは、ひとつのモノのなかに「仮想の楽園」がまさに誕生した瞬間でした。(五味 俊晶)

松本仙峯《花鳥画》  
当館寄託レポート  
美術館を支えるボランティア

美術館を支えている存在としてボランティアがいることをご存知でしょうか。美術館のボランティアには3つの活動があります。

まずは情報サービスボランティア。総合案内や図書コーナーでの案内を行っています。総合案内では来館者を気持ちよくお迎えし、来館者のいろいろな問い合わせに対応していただいています。図書コーナーでも利用者が快適に利用できるよう配慮していただき、図書の問い合わせにも答えていただいています。

次に作品ガイドボランティア。当館の対話型鑑賞プログラムのナビゲーターとして展示室等で活動を行います。ガイドボランティアになるためには、1年間研修を受けますが、ボランティアの勉強会や練習を日々重ね、展覧会毎に担当学芸員のレクチャーを受け、対話型鑑賞に参加される利用者との楽しい時間を過ごすために熱心にナビゲーターの役割に磨きをかけています。

最後は創作活動ボランティア。創作活動の補助やアトリエの整備を行うボランティアとして、今年度から活動が始まりました。開館記念日の手づくりワークショップは内容を決めるところから関わっていただき、内容も充実したものとなり、たくさんの方に参加いただくことができました。

日々、美術館と利用者をつなぐ役割として、ボランティアの皆さんの活躍に感謝しています(石崎 三佳子)



## ご利用案内

- 開館時間 9:40～18:00(入室は17:30まで)
- ※ 企画展及び貸展については、入室時間が異なります。
- 休館日 月曜日  
(祝日、振替休日及び第1月曜日に当たる場合は開館し、その翌日が休館日。年末年始は12/29～1/3が休館日)



本紙レポートにあらずに吉田順彦先生にご来館いただき、アトリエにて公開制作を実施しました。久しぶりの公開制作には、アトリエが埋め尽くされるほどの参加者が集まり、大盛況でした。先生の気さくなお人柄により、会場は終始和やかな雰囲気でした。(石崎 三佳子)

カンフォロ  
Canforo No.59愛媛県美術館ニュースNo.59 2020  
発行日=令和2年1月10日 編集・発行=愛媛県美術館

愛媛県美術館

〒790-0007 愛媛県松山市堀之内  
TEL 089-932-0010 FAX 089-932-0511  
https://www.ehime-art.jp/Canforo カンフォロとは?  
イタリア語で「くすのき」を意味します。愛媛県美術館の中庭に立つ3本の大きなくすのきにちなんでつけられました。

## 企画展

没後20年  
畦地梅太郎  
山のなか、本のなか

2020年2月1日(土)～3月29日(日)

主催:2019畦地梅太郎展実行委員会(愛媛県、南海放送)

あぜちうめたろう

畦地梅太郎(1902-1999)は愛媛県北宇和郡二名村(現・宇和島市三間町)に生まれた日本の版画史を語る上で欠かすことの出来ない版画家のひとりです。畦地は、作画を行う作家が自ら彫り、自ら摺ることによって版画の全ての工程を手掛ける「自刻自摺」による「創作版画」が隆盛した時代に活躍しました。彫りの勢いから、摺りの庄まで、すみずみまで作家の表現が充溢した創作版画は、作家のぬくもりまで感じられる表現として、今も多くの人々を惹き付けています。

16歳で故郷を離れ、20歳で画家になる決心をした畦地は、24歳から版画制作を始めます。その才能をいち早く見抜いた平塚運一や、後に師と仰ぐ恩地孝四郎らに学びながら独自の作風を確立していきます。そして、35歳の時患った眼疾保養のために帰郷して以後、本格的に山を主題とした制作に取り組みます。そこから生涯にわたり、山の風景、生き物そして山男まで、様々な角度から「山」を表現し、やがて「山の版画家」として広く知られるようになります。

本展では、初期に手掛けた鉛凸版による版画から、畦地が最晩年に制作した愛媛県民文化会館の緞帳原画《石鎚山》(1985年)まで、網羅的に版画作品を紹介すると共に、山岳芸誌『アルプ』や書籍装幀、数多く制作した蔵書票等もあわせて紹介し、畦地の版画制作への想いを本の仕事からも紐解きます。

また畦地は、今も続く南予地方の版画の流れの源といえる作家です。同時開催するコレクション展「南予の版画家たち」では、畦地に縁のある版画家3人の作品を紹介します。畦地の活躍中にその制作や活動に刺激を受けた中尾義隆(1911-1994)と菊澤尋吉(1922-2004)、また三間で銅版画家として活動する松本秀一(1952-)らの個性際立つ作品を通して、畦地・南予・版画の関係に思いを馳せていただければ幸いです。(喜安 嶺)



《白い像》1958(昭和33)年

《樹海をとぶ鳥》  
1967(昭和42)年コレクション展  
南予の版画家たち  
2020年1月18日(土)～4月26日(日)

つぶやき



美術館総務課職員は、ラグビーではフルバックとリザーブという役で、学芸員がフォワード、バックスを形成して各分野から良質の展示を実施しており、私たちはゲインラインを切りませんが、常にしっかり守り、時にはちゃっかりライン参加して盛り上げていきます。(川西 公政)



# 吉田勝彦の銅版画

I "La Habitación de mi corazón(我が心の部屋)"-新収蔵作品を中心に  
2019年8月20日(火)~11月17日(日)

II 小さな風景 -新収蔵作品を中心に  
2019年11月23日(土・祝)~2020年1月13日(月・祝)

限りなく細い三日月のかすかな光の下で、測候所の周囲をいくつものライトが照らす幻想的な情景—真夜中の闇の中に浮かびあがる精緻な線の描写が特徴のこの作品は、銅版画技法のひとつであるメゾチントを用いて制作されています。この技法は、まず版一面に縦・横・斜めに細かい溝をつける「目立て」をし、表面に無数の凹凸を作りインクが絡まりやすくします。さらにその表面を削り取ることによって、墨の濃淡をつけ図像を表現するのです。

吉田勝彦(1947-)は、東京藝術大学大学院で駒井哲郎に師事。1970年代半ばには西欧やベネズエラに滞在し、帰国後に現地での体験をもとにした作品群を制作しました。また合わせて身近な日本の風景にも目を向け、茨城県に拠点を移して自然豊かな情景を銅版で表現しています。

当館では昨年度81点の寄贈を受けたことを機に、2回に分けて新収蔵品を中心に作品をお披露目しています。前期では前述の異国をテーマにした作品群を中心に展示し、11月2日(土)には作家本人を招いてのトークイベントと公開制作を実施しました。当館のアトリエにて銅版画の自作3種類の刷りを実演していただき、多くの方が版画制作の現場を見る貴重な体験となりました。

そして後期では、1980年代以降に制作された、周囲の身近な風景や静物をモチーフとした作品を紹介しています。見慣れた風景が全く新しい様相を帯びて立ち上がる、吉田勝彦の作品世界をぜひお楽しみください。(杉山 はるか)

## Katsuhiko Yoshida



吉田勝彦《小さな測候所(真夜中)》1985年



吉田勝彦 銅版画公開制作 11月2日(土)

# 松山藩御用絵師列伝

2019年11月23日(土・祝)~2020年1月13日(月・祝)

昨年(2018年)の開館20周年を機に、コレクションの魅力について、さらにディープに発信していこうという意図で「コレクション特別展」を新たにスタートさせました。第1回目となった昨年度は、松山市出身の洋画家・古茂田守介(1918-60)の生誕100年記念展を開催し、多くの皆様にご覧いただきました。

続く第2弾となる今回は、「松山藩御用絵師列伝」と題し、当館所蔵品及び寄託作品から、江戸時代の松山藩主・久松松平家に仕えた9人の御用絵師たちの作品52件を紹介しました。当館が位置する堀之内(城山公園)は、松山城三之丸の跡地です。そうしたゆかりもあり、開館以来、松山藩御用絵師たちについて精力的に調査研究・作品収集を進めてきたところですが、今回はその成果を初めて一堂で紹介する機会となりました。ここ1、2年で新たに収蔵・寄託された作品も多く、出品作品中約半数は今回が初展示となりました。

おそらく「松山藩御用絵師」と聞いて、その名前を挙げられる方は少ないと思います。今回の展示を通して、「御用絵師」という人たちの存在や、彼らの知られざる画業に触れるとともに、近世の伊予松山に花開いた文雅の世界を支えたその姿に、鑑賞者の皆様それぞれに思いをはせていただけたのなら、何よりうれしい限りです。(長井 健)



展示会場の様子

美術館では、中学生の『職場体験学習』を受け入れています。



これは何でしょう!?



当館では、中学校の職場体験学習を年間10校程度受け入れています。2~4日間程度、朝から15時頃までの短い時間ですが、学芸課普及グループ等の仕事を体験してもらいます。

内容は、館内視察からはじまり、ワークショップやアトリエの補助として、試作作りや講座の手伝い、作品整理補助として館蔵品の保存袋を作ったり、保存について考えた後に監視業務の体験をしたり、2・3時間ごとに様々な体験をします。

最近では、よく観察したり考えたりする活動にも力を入れています。一つは、コレクショントーク、「対話型鑑賞」の体験です。1点の作品をじっくりと鑑賞した後、気づいた点や感じた事柄を、鑑賞している人々と一緒に根拠を見つけながら鑑賞していきます。またもう一つは、「展示室のみみつ探し」。美術館の大部分を占める展示室を解き明かす活動をしています。日ごろ展示室では、作品を鑑賞しますが、この時間は、展示室の構造や備品に着目して、感じたこと、不思議に思ったことを付箋に書き出し、秘密を探ります。美術館は薄暗く寒い。床から風が来る。壁面についている金具はなに。部屋の角に四角い箱がある。天井の形が浦鉾みたい。大きなガラスケースの中の作品はどこから出し入れするの? などなど。見れば見るほど、気になるポイントが出てきます。

美術館の仕事に興味を持った中学生は、ぜひ体験しに来てください。(田代 亜矢子)



気づいたことがいっぱい!



アトリエの手伝い



レポート 1日講座

## 粘土でオリジナルマトリョーシカをつくろう!

2019年9月8日(日)・22日(日)



企画展「ロマンティック・ロシア」に関連し、ロシアの民芸品マトリョーシカを粘土でつくる講座を開催しました。「マトリョーシカ」とは、ロシアで生まれた木製人形で、スカーフ姿の若い女性が描かれています。マトリョーシカの特徴は、人形の中にさらに小さな人形が入っています。今回は、粘土でつくるということで、大、中、小の3体の入れ子となるように、オリジナルのマトリョーシカをつくりました。

まずは、つくりたい形に合わせて新聞紙を強く丸め、大と中のマトリョーシカの型をつくります。その型に食品用ラップフィルムを巻き付けます。粘土は紙粘土を使用し、のべ棒を使って厚さ5mmぐらいまで均一に伸ばします。しっかり伸ばしたら型を包むように粘土を巻き付け、大と中の人形をつくります。次に、マトリョーシカが上下に開くところに糸を巻き付け、引っばって、粘土を切ります。小の人形は型なしでつくります。ここまでで1日目は終了です。2日目は十分に乾燥させた粘土から新聞紙の型を抜き、アクリル絵の具で色を塗って完成となります。

今回の講座では、粘土を使うことで、木製のマトリョーシカのように専用の道具がなくても、気軽につくることのできる内容となっています。また、手やしっぽを付けたり、帽子を被せたり、粘土の特徴を生かしたアレンジも楽しめます。ぜひ、ご家庭でもオリジナルのマトリョーシカをつくってみてはいかがでしょうか。(高木 学)



愛媛県美術館のPRのため、愛媛CATV『ようこそ県美へ』に出演し、早半年が過ぎました。この番組の1番のファンは、我が家の小さな娘で、PRしている姿を何度も見て楽しんでいるそうです。みなさまにも御覧いただければ幸いです。(高木 学)